
秋風流るる今、願う

疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋風流るる今、願う

【Nコード】

N0738B

【作者名】

疾風

【あらすじ】

謎の失踪をとげた魔術の師匠。その弟子である少女、秋風が失踪の前に師匠が残した手紙を読む。『お前が魔術師として強くなれば、やがてまた会えるだろう』師匠と再会を果たすため、秋風は精霊と契約を交わしてゆくこととなった。

プロローグ 少年の感じた痛み（前書き）

一応筋道はあるのですが、途中で書けなくなっちゃうことが多々あります；

今回は頑張りたいと思います（汗

プロローグ 少年の感じた痛み

7人が取り囲む魔法陣の中心には宝石箱。俺はその前に立っていた。まるで、全てを飲み込むかのような黒に目がチカチカする。恐怖、そんな感情はない。ただ、生物としてその黒が嫌だった。

「成功か？」

「成功したのだ！」

周りから聞こえた声の意味はなぜか理解できた。それは、俺の器になっっている人物の脳にインプットされていた言語だからであろう。そう、俺はこの体と一緒に全ての記憶を受け継いでいた。人が絶対に持てない記憶、『死』の記憶さえも一緒に……

「どうした？ ライド？ 聞こえないのか？」

一言も喋らない俺に不安を感じたのか一人の老魔術師が声をかけた。

「俺はライドじゃない。俺は……俺は誰なんだ？」

分からない。俺は何者だ？ 俺は……俺は……

「ライド……ライドなのだろう！ 早く私に『ただいま』って言うて……」

「落ち着いてください、シェンド様。多分、ライド様の体に違う者の精神が宿ってしまったのでしょう。私達の術は失敗に終わりました……」

泣き崩れる老魔術師を支えながら、若い魔術師が苦い顔をしながら自分の見解を述べた。

「失敗したというのか」

「違う者って誰？ 俺は誰？」

自分が何者か分からない違和感、それが体の中を駆けめぐる。

『殺すのだ。皆殺しだ。お前を不安定なまま生み出したこいつらに復讐をするんだ』

心の中に深く低い声を感じた。

『私はお前が誰なのかを知っている。私の言うとおりにすれば、そ

のうち自分が何者かが分かるだろう』
その瞬間何かが吹っ切れた。俺の中から力が濁流のように流れ出す。
何もかも飲み込む黒い渦が次第に大きくなり世界を破壊し尽くした。
ただ、荒れ野だけが続く世界。そこに俺は立っている。少しの痛み
を感じながら……

1章 少女の涙（前書き）

まだ至らない点が多いと思いますが……

1章 少女の涙

「月の霞し今、誓う！ 煉獄の炎よ、刃となりて我が前に現れ賜え！」

私の足下に魔法陣が出現し、紅く輝き始める。皮膚がヒリヒリとするほどの熱量に必死に耐え、炎が手に集まるようにイメージをした。

「紅蓮剣！」

その叫び声と同時にイメージ通りに構築されてゆく。それは、片刃で刀身が少し沿っている剣。どこで見たかは分からない。しかし、それが一番イメージしやすい形だった。

「秋風」

「はっはい、何ですか？」

びくっとした瞬間に集中がとぎれ、剣は跡形もなく消滅していた。振り向くと後ろには炎のような長髪に漆黒のローブを纏った若い男。私の師匠がこちらに向かって歩いてきていた。

（魔術発動中には絶対に話しかけてこない師匠がどうしたんだろう……）

「集中を乱して悪かった。少し話したいことがあってな。今、いいかい？」

「はい……」

改まった師匠の言い方に私の不安は募るばかりであった。

（破門とかだったらどうしよう……）

そう考えると幼い頃のノイズがかった記憶が呼び起こされる。

『秋風、ごめんね。こんなお母さんを許してね』

最後に聞いた言葉が頭の中を駆けめぐる。

（嫌だ、嫌だ。聞きたくない）

私は目の前にいる師匠に全集中を向け、余計なことを考えないようにした。それを確認したかのように師匠が口を開いた。

「魔術についての話だが……今、秋風が使ったのや、私がいつも使

っているのは『神の魔術』というものだ」

「『神の魔術』？」

初めて聞いた単語に私は戸惑った。

「そうだ。神の使い、精霊と契約することで貸して貰える力だ。私の詠唱、『月の霞し今、誓う』の部分が精霊との契約の証になっている。ここを『契約詠唱』と呼ぶのだが、名前なんてどうでもいい。これは、契約した人自身とその人が認めた人しか使うことができない」

私は最後の言葉を聞いて更に戸惑った。魔術について色々な本を読んだが、偉大な魔術師の契約詠唱がのっていて、それを詠唱すれば魔術を使うことができた。実際、使用できた。それなのに……知識の根本を崩されるような気がして、私は少し恐ろしかった。

「どういことですか？」

「……気付いているだろうが、神の魔術を使えるのはほんの一握りだ。魔術にはもう一つ『影の魔術』という物がある。契約しなくても使える魔術。これが一般的に使われている魔術だ」

また、聞いたことのない単語……

「『影の魔術』はどこから力を使ってるんですか？」

そう訊ねると師匠は黙った。右手で髪をいじりながらはぐらかすように、

「それはまだ知らなくて良いことだ」

そう言い終わると『今日は遅いから、もう寝なさい』と残し自分の部屋に戻っていった。私は師匠の態度に何か違和感を覚えたが練習を終えた。

「うーん……」

目覚めが悪い。ローブは汗でべっとりとしていて気持ちが悪かった。なにか、悪い夢でも見ていたのだろうか？　だが、夢の記憶はない。

「今日も一日頑張りましょっ」

と空元気をだし、部屋のカーテンをあける。期待していた快晴はなく、どんよりと空を雲が覆っていた。それが、私の心を更に暗くさせる。

「師匠？ 朝ご飯作りますね」

そう言ってダイニングに降りていくが、いつもと感じが違う。

「師匠、寝坊ですか？ いつもならとつくに起きてて、一人でコーヒー飲んでるのに。朝ご飯と一緒にコーヒーもいれますか？」

返事はない。私はいつも師匠が座って、コーヒーを飲んでいる場所。窓よりの椅子。その上に白い物を見つけた。

「なんだろう？」

私はそれを手に取る。そこには見慣れた師匠の字、細かく丁寧な字。『こんな出発の仕方を許してくれ。しなくてはならないことができたのだ……秋風、お前を一人にすることはすまないと思っている。

お前が魔術師として強くなれば、やがてまた会えるだろう。たお前の元気な姿を見れることを願っている』

それを読んで、私は床へ崩れ落ちた。何度も何度もその短い文章を読み直す。だが、文面は一語一句変わらない。当たり前のことだが、私には受け入れられなかった。徐々に視界がぼやけ、顔が熱くなる。『ごめんねとか……すまないとか……そんな言葉いらないから！

誰か、誰か、私の側にいてよ。ずっと……ずっと……』

その声は虚しく部屋に響くだけで私の手にはしわくちな手紙だけが残った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0738b/>

秋風流るる今、願う

2011年2月1日03時37分発行